

文献案内

飯田剛彦「平安時代の東大寺における古器物・古経巻の保存と活用」(『叙説』第四七号、奈良女子大学日本アジア言語文化学会、二〇二〇年三月)

二〇一一年から四年間、屋根の葺き替えを主とする正倉院宝庫の整備工事が行われた。宮内庁正倉院事務所では、工事にあたり宝庫外に運び出した唐櫃二〇六合について、赤外線カメラ等を用いた悉皆調査を実施し、新たに多くの墨書銘文を確認して、様々な新発見がもたらされた。その調査成果は、飯田剛彦・佐々田悠「正倉院櫃類銘文集成(一)―古櫃」(同(二)―慶長櫃・元禄櫃)、『正倉院紀要』四一・四三、二〇一九・二一年)に詳しい。

本稿では、そのうち三点の墨書銘をとりあげ、平安時代における東大寺内部における文物の動きを描き出していく。正倉院宝庫には、光明皇后が奉獻した宝物以外にも、奈良時代の製作にかかる貴重な古文化財が数多く残されている。これらはかつて東大寺の諸堂塔で分散的に管理されていたが、九世紀半ばの承和年間に管理状況の把握が進められ、一〇世紀前半の延喜年間にあって保存体制の強化が図られると、大規模火災の経験から防災・防犯意識が高まったこともあり、より厳密な管理が可能な寺内各所の網封倉に古器物が集約されることになった。さらに一〇世紀半ばになると、古器物は正倉院宝庫で一括管理されるようになり、同じく五月一日経を中心とする古経巻も正倉院宝庫にいつしか移納され、古文化財の効率的な一元管理体制を、東大寺全体として実現させることになった。古経巻については南都焼討後に取り出され、寺の教学復興を支えるべく活用されたが、後に尊勝院聖語蔵に納められて現代に伝わっている。本稿では、これまで『東大寺要録』によって論じられてきた寺内での古文化財の動きを、実際にそれらを納めて移動した唐櫃への墨書という、より信頼度の高い史料をもとに、具体的に描き出すことに成功している。文化財保護の歴史という観点からも注目すべき成果であろう。

延喜二一年(九二一)に造東大寺所の倉庫から正倉院宝庫へと移されたことを示す墨書をもつ唐櫃二合について、そこには正倉院文書のまとまりが納められていたかも知れないとの指摘も刺激的である。(稲田奈津子)

神奈川県立歴史博物館「『赤星直忠考古学研究資料』デジタルアーカイブ」(二〇二一年九月二三日公開)

赤星直忠(一九〇二〜一九九一)は、三浦半島を中心として主に考古学的な調査を重ね、神奈川県域の文化財保護に功績があり、中世史研究にとっても鎌倉周辺の「やぐら」研究などで馴染み深い。その調査記録資料類、いわゆる「赤星ノート」は生前に神奈川県へ寄贈され、現在の研究論文等で引用されているのに接する機会も少なくない。

一方、今回のデジタルアーカイブで全貌が公開されたのは、『考古学研究資料』と題されたフィールドノート全六冊(赤星直忠博士文化財資料館所蔵)で、全体の分量は「赤星ノート」に及ばないが、亡くなるまで手元で保管されていたものである。記録期間は二〇歳の一九二二年から五〇歳の一九五二年に及ぶが、大部分は美術教師を勤めながら遺跡調査を重ねた一九四〇年頃までになる。本人の研究としても地域の学術にとっても充実した青春期の記録で、今日では失われた遺跡もあり、また軍の統制による制約下での活動でもあって、それ自体が時代の証人になっている。

本アーカイブでは、見開きページで白紙等を除くと約六五〇カット、それに貼り込み写真類は別カットとして収め、裏面のメモもできるだけ画像化した。新聞記事、ガリ版刷の資料類や私信の貼り込みもあり、私的事情の箇所などは細かくマスキング措置がなされている。付加データとしては見開き一カットを単位に、概要、遺跡・寺院等、市町村名、登場人物、年月日といったインデックス情報を拾って条件検索の項目化し、また全文検索の対象にもして(例えば原点となる宗元寺は全冊に登場)、メモの翻刻も一部登録済で、関連情報ともども、利用者参加により充実を図る体制を整えている。

別途、一覧性の高いPDF版として冊ごと全頁カラーで、奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」に登録してWeb公開している。こちらでは左右余白に見出しを加え、冊ごとに目録・索引を備えている。いずれも出典明記を条件とする自由利用を可能としている(CC BY 4.0)。

https://jimapps.ne.jp/akahoshinaotada_digitalarchive/

(藤原重雄)

「特集 記録と再生の倫理学」(芸術批評誌「リア」四七号、リア制作室、二〇二一年一〇月)

名古屋・東海地方を拠点に現代美術批評を営む雑誌(二〇〇三年創刊)で、巻頭に組まれた特集。A5判で三〇八頁の短い七本と作家等のコラムからなるが、とくに歴史学の研究と深く関わるトピックを扱った二本を紹介する。

副田一穂「色眼鏡を外す―歴史資料のカラー化にまつわる倫理的問題について―」は、英国・帝国戦争博物館の依頼により同館のフィルムアーカイヴから制作した映画「They Shall Not Grow Old」(邦題:彼らはいきていた)(二〇一八年)、および渡邊英徳らによる戦災記録写真等を用いた「記憶の解凍」プロジェクトを例に、副題の論点をごく簡潔に論じる。両事例においては、モノクロ原資料のカラー化とその提示プロセスに問題が潜んでいる。基礎的なメタデータの欠落ないし軽視、原資料の検証(歴史学で言う史料批判)という観点の不在、カラー化の妥当性を「修復」過程に含めたり、「解凍」という比喩でかわしてしまうことなどにまともめられる。映像・写真が情動に訴える効果の大きさをゆえに、いつそう倫理的課題に立ち止まる必要性がある。

朝日美砂子「名古屋城 記録の歴史」は、明治維新後の名古屋城に関する記録資料の状況を整理し、外部に膨大に残されていることを指摘する。陸軍師団の所管から、本丸周辺が宮内省へと移管され、その離宮も昭和五年(一九三〇)に名古屋市へ下賜された。上質な資料は所有者の変更時に形成され、昭和二〇年五月の空襲焼失以前の姿を伝えるものとなった。こうした資料にもとづき再建された昭和天守閣について、その建築詳細は公的出版物とされず、さらに再建後の名古屋城の諸活動も記録されぬまま、解体される方向へと向かっている。また近年完成した本丸御殿についても、復元過程を詳細に記録した出版物の予定がないという。

この二本に共通するのは「なしくずし」(18頁)に進められる事態に対する、学術研究からみた批評的な視点で、それはアートの社会的機能に関わる立ち位置でもある。

(藤原重雄)

画像史料関係文献目録

氏名・タイトル	出典・号数・年月
谷川ゆき「海の見える杜美術館所蔵の厳島関連資料と「厳島に遊ぶ―描かれた魅惑の聖地―」展について」	『厳島研究』16 2020.3
高木叙子「織田信忠画像・徳川家康画像保存修理事業報告」	『安土城考古学博物館研究紀要』26・27 2020.3
山下立「近江笏谷石製文物集成(中間報告)」	『安土城考古学博物館研究紀要』26・27 2020.3
浜野真由美「和歌賛から見た島津家旧蔵「架鷹図屏風」の成立事情―近世初期の宮廷における寄合書の観点から―」	『日本研究』61 2020.11
角田勝久「光明皇后の<楽毅論>と王羲之の筆筈」	『奈良美術研究』22 2021.3
石井健「『東大寺献物帳』所載屏風の「葉帖角」について」	『奈良美術研究』22 2021.3
小池寧々「藤田美術館所蔵「玄奘三蔵絵」小考―詞書と絵画表現にみえる観音信仰に着目して―」	『美術史学』42 2021.3
杉本欣久「資料紹介 速水宗達写『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』―大徳寺塔頭に関する絵画の筆者と諸情報―」	『美術史学』42 2021.3
比毛君男「研究ノート 中世常陸の石造物と常陸大宮市の様相(上)」	『常陸大宮市史研究』4 2021.3
小岩弘明「左武の人大槻磐溪―高島秋帆との邂逅の中で―」	『一関市博物館研究報告』24 2021.3
早川正司「千葉氏関連石造史料調査録(2)」	『研究紀要(千葉市立郷土博物館)』27 2021.3
入谷和也「高野山町石の種子について」	『密教文化研究所紀要』34 2021.3
木下浩良「新発見の細川満元宝篋印塔―細川氏と高野山高祖院―」	『密教文化研究所紀要』34 2021.3
荒木和憲編「共同研究 中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」	『国立歴史民俗博物館研究報告』223 2021.3
安永浩「「松浦古跡 付捕鯨記事」―草場佩川が見聞きした松浦地方の史話、名護屋城跡、小川島捕鯨―」	『研究紀要(佐賀県立名護屋城博物館)』27 2021.3
村松洋介「「朝鮮日本図説」からみた倭城・倭寨」	『研究紀要(佐賀県立名護屋城博物館)』27 2021.3
木戸雅寿「『天守指図』の謎―安土城天主をめぐる―」	『十六世紀史論叢』14 2021.3
荒井利之「正倉院所蔵の巻筆と書蹟」	『正倉院紀要』43 2021.3
杉原諒「千燈石仏―石に表現された阿弥陀来迎図像の基礎研究―」	『東京藝術大学美術学部論叢』17 2021.3
藤田励夫「安南日越外交文書の花押についての試論」	『東風西声』16 2021.3
岩瀬万寿美「十住心・十牛図の境涯に関する比較検討―道歌を媒介として―」	『仏教文化研究所紀要』40 2021.3
末吉武史「糸島市・住吉神社の釈迦十六善神図」	『研究紀要(福岡市博物館)』29 2021.3